

平安朝物語の形成

著者	後藤 幸良
号	21
学位授与機関	Tohoku University
学位授与番号	文第255号
URL	http://hdl.handle.net/10097/59385

ごとう ゆきよし
後 藤 幸 良

学位の種類 博士(文学)
学位記番号 文 第 255 号
学位授与年月日 平成21年10月8日
学位授与の要件 学位規則第4条第2項該当

学位論文題目 平安朝物語の形成

論文審査委員 (主査)

教授 佐藤 伸 宏 教授 佐藤 弘 夫
准教授 佐倉 由 泰

論文内容の要旨

本論文は、平安朝の『源氏物語』を中心とする虚構の物語についての、形成に関する研究をまとめたものである。

「形成」とは一般的に、「形ができて上がること。形づくること」を意味し(『広辞苑』第六版)、特にその「形づくること」という説明によく窺われるように、作品の完成に至るまでの過程全体を背景で支える作者を、欠くことができない概念である。平たく言って「形成」とは(作者が)「作品を形づくること」なのである。このような作者の存在を前提とする文学の「形成」の諸要素——とりわけ構想・構成など——は、従来の平安朝物語の研究において次第に忘れられてきたと言ってよい。

『源氏物語』に視野を限ると、昭和三十年代以後の研究は、成立論——構想論——構造論——文体論——表現論——テキスト論とゆるやかに推移してきた。この過程で、作者に関わる意味から、作品の表現の多義的な意味へと研究の焦点が次第にずれていった結果、作品の全体的な意味は見失なわれ、読者が次々に生み出す多義的な意味に溺れるも同然の事態に至っている、と考えられる。

しかしながら、表現は人間と断絶した記号になり切れるはずもなく、人間的主体に関わる意味を含み続ける。それゆえ本研究では、表現を背後から支えている右のような主体を〈作者〉と呼び、その〈作者〉の存在を必須とする作品の「形成」に関わる諸要素を、主に構成・構想を中心に考察する。先行の構想論の成果を批判的に継承しつつ、表現——構成・構想——〈作者〉という回路を、より豊かに明確に押さえていこうとするのである。その場合、構想(=〈作者〉の創作意識および意識内容)の考察は、必然的に先行の表現をどのように踏まえているか、すなわち表現の引用の問題にも踏み込んでくる。平安朝の文学がどれも先行の様々な文献を引用しつつ形作られていることは常識に属すが、とりわけ『源氏物語』が漢文世界を引用する、その重さには注意を払う必要がある。和漢比較文学的観点もまた、本

論文の一部として加わってくるゆえんである。

右に述べてきた研究状況と本論文の立場は、そのまま『源氏物語』以外の前期物語や『狭衣物語』にも基本的に当てはまる。これらの作品のいずれについても、その研究史が〈作者〉を放逐して多様な読みをするという方向に推移してきたことを見るだけで、事態は明らかであろう。

以上に述べてきたことを、改めて平安朝の作り物語全体の問題として拡大し、本論文の立場を再確認すると、本論文は、平安朝物語の表現から、形成の次元に関わる構成や構想をはじめとする様々な意味を汲み上げ、それらの事態に表現を背後から支え続ける主体＝〈作者〉の物語の意味を透視しようとするものである。要するに〈作者〉に関わる表現の意味を掘り上げようとする、ということだ。それは理論的には、多くの後代の読者達による恣意的な意味を排除して、最初の〈作者〉の表現の意味への遡源をもたらし、その過程をたどる読者に〈作者〉の表現の意味を再体験させるはずである。その時、〈主題性〉と呼ばれることもある、一個の作品を描き組み立てる全体的作業をその根源で支え続けた力＝物語する主体的意味が、読者の、長い物語を営々と読み続けることの主体的意味と合わせて浮かび上がってくる。そしてそれらの意味は、以後各章で具体的に確認していくように、従来の把握とはかなり異なるものだったと考えられる。

第一篇「前期作り物語の形成をめぐって」（Ⅰ『竹取物語』第一章～第三章／Ⅱ『伊勢物語』第四章～第六章）では、主に漢詩文や日本神話を引用しつつ物語が成り立ってくる様相を手掛かりに、前期物語がそれぞれ有している全体的意味を明らかにする。

第一章では、『竹取物語』のかぐや姫の降臨と翁による養育、かぐや姫の天人達に伴われての月世界帰還と帝による不死薬焼却など、すなわち物語の冒頭部と終末部（貴公子達の求婚譚以外の部分）に、『漢武帝内伝』が深く関連することを指摘する。『内伝』の武帝以外の設定は、美・愛をかぐや姫に集中させ、非地上的な仙界的面を「王と思しき人」や従者に継承する形で、物語と対応している。それに気付く時、かぐや姫の愛の獲得の過程が浮かび上がってくる。また『内伝』の武帝と物語の帝との関係も、男が複数化することを除けばほぼ同様の継承関係と見られる。ただし『内伝』にない惨めな翁を新登場させ、表裏して帝に理想性を付与するという、物語側の変化には、注意される。それは、『内伝』の表現機構を深く受け止めつつ、内面的帝像に、『漢書』的理想性をも付与するための変化であった。以上の『内伝』引用は、いずれも人間の内面への注意を喚起しており、物語全体を愛の獲得の物語として読むべきことを、指示している。

第二章では、かぐや姫をたった一度見たことが、終生帝を肉体抜きに恋に惑わせることに注目し、そこに『漢書』李夫人伝が『竹取物語』の下敷きの一つとなっていることを看取する。そして帝が女の実貌を見る時間幅が、李夫人からかぐや姫へと大幅に短縮されている点に、李夫人伝を全体的に見渡し、女と帝の共生の長さから具体性をはぎ取り、「一顧」の象徴的重さを増している事態を合わせ看取して、それは『漢書』以後の中国詩文における李夫人享受を受け止めた結果であると、説く。『竹取物語』の一基盤としての李夫人伝の、その具体的な踏まえられ方に注視しようとする論である。

第三章では、『竹取物語』の主要な段落末尾にある、起源譚の結末の表現効果を手掛かりに、物語の全体的意味を抽出する。すなわち『竹取物語』の起源譚の結末は、『古事記』『日本書紀』『風土記』などに見える起源譚の結末との同質性において、はるか〈昔〉の日本の史書や『風土記』にある起源譚の結末を喚起し、その始源的時空を物語世界に導入する。と同時に、改めて日本の史書や『風土記』の起源譚の結末との微妙な異質性において、物語側の〈男の内面〉への強い志向性に注目させ、男の〈愛の深化の物語〉として物語を読むことを促す、と考えられる。第一章から第三章まで全体として、愛の獲

得の物語となっていることが、複数の角度から浮かび上がってくる。

以下、『伊勢物語』に目を転ずる。第四章では初段に「登徒子好色賦」が引用されている可能性を新たに指摘する。特に、「好色賦」の第三段（章華大夫の話）は、第二段までにおいて宋玉が内面に潜在させていく他なかった、男がより一層の美女に出会ったら顕すであろう恋の情念の高潮を、代行的に明示するものであり、その最も強烈な美女体験が初段に継承されていくと考えられる。「好色賦」第三段と初段の対応関係を具体的に探ると、昔若い頃身分ある男が、新都から旧都に旅してその郊外をぶらつき、見かけた美女に先行の韻文を踏まえた恋の詩歌——その土地にちなむ、民衆的基盤を有する、花＝男女の暗喩でありうる、袖を切ることとも関わる——を送ることなどが、一致する。『文選』の「好色賦」の前後には、「高唐賦」「神女賦」「洛神賦」があり、『遊仙窟』も同質な世界を示している。そのような〈美女との会合・別れ〉の母胎から、章華大夫の恋の始まり部分を特に引用することによって、初段は男の恋情を行き場のない形で高潮させ、以後の男の恋の人生物語全体を喚起する力を、その物語冒頭部において確保しようとするのだ、と説く。

第五章では、第九段の三河国の物語に、『楚辞』の「湘君」「湘夫人」が引用されていることを指摘する。九段における屈原引用の従来の指摘は、「九章」や「漁父」の屈原像などに限られており、それらは遠く離れた男を思う屈原ばかりである。しかし物語の男主人公は女を思うことに傾いており、その点で、男が女を思う「湘夫人」の引用を合わせ考えることによって初めて、従来の指摘の不備を補うことができる。遠ざかった帝の妻と帝を、水辺の植物に託して恋慕し、さまよおうとする物語の男の姿は、「湘君」「湘夫人」を重ね引用することによって、より一層屈原的な様相を深める（なお、九段で水辺の植物——杜若／かきつばた——を重ねたことが、後代に杜若＝カキツバタとする訓を生じさせる一原因となったのであろう）。高貴な女への恋に破れ東国を放浪し、流罪になり、津の国や和泉の国に逍遙する男。その背後に、美しい女神達に近づこうとして阻まれ近づけず、男神からも疎んぜられ、絶望して「杜若」を折り取り川辺にたたずむ屈原が、浮かび上がり重ってくる。そのような屈原引用が、帝の妻への悲恋の重大性をより印象づけ、逆に他の諸段での様々な恋の変奏を許すことにもなる。「湘君」「湘夫人」引用は、『伊勢物語』の根幹そのものを背後から支えるべく機能している。

第六章では、第二百二十三段の女の歌が『詩経』鄘風「鶉之奔奔」詩を典拠としていることを、新たに指摘する。従来第二百二十三段の女は、ひたすら素直で従順で受け身な人であると見られてきたが、その女の歌と、それを男が「めでて」改心し女の元に止まることになる結末との間には、文脈の不整合がある。この不整合は鶉の和歌史からは説明できず、目を漢籍に転ずると『詩経』「鶉之奔奔」に注目される。この詩の、仲良く連れ添う鶉や鶉←我（性別不明）の嘆き→淫乱な兄＝君（男）という構図を、草木鳥獣魚と人とを虚構的に重ね合わせる、平安時代の想像力が受けとめ、我に女を充当し、具体的に形づくっていった結果、物語の女の歌が成り立つ。『伊勢物語』の終末において、愛の訴えと狩の話柄を同時に実現させる必要から、「鶉之奔奔」が典拠として引き寄せられ、それを変形して第二百二十三段の女の歌が形成されるのである。女は素直で従順であると同時に、才知のきらめきに満ちた聡明な人でもあり、だからこそ男は元の鞘に収まったのであり、「鶉之奔奔」詩を背後において初めて、物語展開は整合する。第二百二十三段はこのような理想的な男女関係を末尾に実現することで、初段と一体となって『伊勢物語』の愛の物語としての性格を枠付け明示している。

第二篇「作り物語の構想枠としての〈季節観〉」（Ⅲ「春」第七章と第八章／Ⅳ「夏」第九章と第十章／Ⅴ「秋」第十一章と第十二章／Ⅵ「冬」第十三章と第十四章／Ⅶ「構想枠としての〈季節観〉をめぐって」第十五章～第十七章）では、『源氏物語』の物語展開全体を、いわゆる「景情一致」と呼ばれ

る深い真実性が一貫して覆い続けている事実に着目し、それが可能になる原理を探究する。その結果、時空秩序に物語内容の構想枠としての意味をも合わせ持たせた、独特な虚構の方法が、『源氏物語』のみならず『うつほ物語』においても用いられている事実を、見出すことになる。

すなわち、『源氏物語』全体を覆う、人々の状況と四季の気候・景物などとの密接な関連は、本居宣長によって注目され、萩原広道によって方法的に捉えられたが、そのような「景情一致」の特質は従来もっぱら登場人物の内面に実現の根拠を求められ、享受の観点から個々の場面の具体相を称賛されるばかりであった。四季と人々とを密接に関わらせる構想の方法として十分に対象化され分析されてこなかったのである。そこでⅢ～Ⅵにおいて『うつほ物語』『源氏物語』の四季それぞれの物語内容が、特有の偏向を有することを指摘し、和漢の四季の文学状況との関連を探って、右の構想の方法の内実に迫ろうとした。その結果、『うつほ物語』『源氏物語』の春物語が、〈始まり〉と〈始まりの終わり〉の構想的意味を有しており（Ⅲ）、同じく夏物語が〈動揺〉の（Ⅳ）、秋物語が〈たゆたい〉と〈終わり〉の（Ⅴ）、冬物語が〈終結〉と〈始まりの萌し〉の（Ⅵ）、構想的意味を有していることを、それぞれ見出す。なお『うつほ物語』の特に中盤部分でそのような意味が不鮮明になっているのは、物語が一元化に向かっていてもなお多元性が残存したためであろうと考えられる。

一部例外はともかく、二つの物語の四季の物語部分が、右のようにそれぞれ特有の意味を有するのはなぜか。それは和漢の史書の本紀的部分に広く見られる時空様式（日・月・四季により詰め合わされた一年が、持続的に積み重ねられていく）の、特に四季の枠組みに、和漢の四季の季節感と一致する、それぞれ特有の物語内容の指定も付け加えられ、それを物語がぴったりに受け入れているからである。このような時空秩序において構想され構成されることによって初めて、物語内容は時空面から整序される、のみならず物語の部分部分は、内容の無限の可能性をある程度制限されることと引き換えに、和漢の四季の文学伝統に浸され支えられつつ、構想され構成されることが可能になる。巨大な物語全体が必然性を湛えつつ、しかも最初から最後まで破綻なく実現されなければならないという、創作の行く手にたちはだかる大きな困難が、このような虚構の方法を導入することで劇的に減じていると考えられる。

Ⅶでは、四季と物語内容とを関わらせるⅢ～Ⅵの方法性を前提としてもたらされてくる、物語の様相に注意し、より高次の次元から右の方法性の存在を確認する。

第十五章では若菜下巻の春の「女は春をあはれぶ」という夕霧の発言に、『詩経』の「春をあはれぶ」女達の世界全体が、個別的語句の引用の次元を超えて引用されていることを指摘し、そのような引用を要請する『源氏物語』の春物語の始源性を見出す。

第十六章では、宇治十帖に至り、男主人公が必然的に理想性を低下させ、矮小化して分裂し、時間の二重化と物語の一層の複雑化を招来することになるのだが、その困難な事態も四季の物語内容の指定（構想枠）に、登場する男の指定——春は匂宮／秋は薫——を加えることで容易に乗り越えられていくことを、確認する。宇治十帖前半の大君物語までは、秋の薫の恋と、春の匂宮の恋とが並列的に展開し、以後中君物語から浮舟入水決意までの物語では、重なりつつ相互的に展開し、それ以後はいずれも低迷することにおいて物語が構想されていく。見てきた方法性が、宇治十帖にまで姿を変えつつ及んでいるのである。

第十七章では、『石清水物語』が秋冬の物語に大きく傾いている事実を指摘し、それが第十六章で指摘した宇治十帖の構想の方法を、武士の物語に向けて何歩か踏み出して受け止めた結果として実現していることを、見出す。

第三篇「『源氏物語』の形成をめぐって」(Ⅷ「正篇の物語」第十八章～第二十三章／Ⅸ「続篇の物語」

第二十四章～三十一章）では、第二篇に窺われる虚構としての『源氏物語』の世界が、どのように形づくられているかを探る。

Ⅷ「正篇の物語」では、正篇の物語の形成のされ方に注意して物語の主題性を抽出する。とともに、従来短篇の面にしか注目されてこなかった夕顔物語および玉鬘物語に長篇的構想力が潜在していることを看取する。

すなわちⅧの主題性を抽出する試みとして第十八章、第十九章、第二十二章がある。

第十八章では、桐壺更衣物語の核心部が長恨歌的要素を除いた叙事的部分にあることを確認し、その中心的話柄である死が実は『うつほ物語』の、死を発条として物語を始める方法性を、受け入れて実現していることを指摘する。死は闘い乗り越えられるべき否定的媒介であって、このことに、物語が悲痛ではなく悲痛を乗り越えようとする〈愛する命の輝き〉を提示しているのを、看取できる。

また第十九章では、「もの心細し」「もの心細げ」が、光源氏と薫の場合やや観念的とも見えるものの、どれも〈死を意識するほどの極限的な不安〉を示し、そこから常に以後の重要な新展開が紡ぎ出されていくと指摘する。そしてこの様相に、『源氏物語』の内面的特質を見出す。

第二十二章では、少女巻の夕霧像が、外部状況を表層のかつ部分的に受け止めなぞる特徴を持ち、それゆえに夕霧の物語は、外部状況を必然性をもって形成するとともに、その外部状況を部分的に夕霧内部に引き込むことにより、積層的に構成されている、と指摘する。このような多元性と複眼性において、少女巻は若菜上下巻の方法性の先蹤を示していると言え、とすると物語の方法性は従来考えられてきた〈真実らしさの高度化〉にではなく、〈真実らしさを湛えた人物像の実現〉にその核心があることとなる。従来右のように人を視野から外すことによって、人の苦悩・絶望に逆説的に説明不能な重い意味を付与し、それが物語の主題性であると捉えられてきたのだが、人を視野に入れ、物語の愛や希望の面をより重視しなければならなくなる。

またⅧにおける長篇的構想力の潜在の指摘としては、第二十章、第二十一章、第二十三章がある。

第二十章では夕顔巻冒頭に夕顔という「かづら」が設定されていることに注目し、それに対応する「葛」「藟」が漢文世界で「何かに頼る若い（弱い・下位の）存在として多く女性に喩えられて」いることを明らかにし、そのような物語が始まろうとしていることを、夕顔物語冒頭において暗示的に示すために、夕顔という「かづら」が設定されていると、説く。夕顔物語冒頭に長篇的射程が存在することの指摘である。

第二十一章では、夕顔巻の三輪山神話引用が、従来の『古事記』の範囲を超えて、『日本書紀』の重層的な三輪山神話の範囲まで及んで引用されることにより、夕顔物語の終末のみならず、その背景にある源氏と葵上の物語までの構図を、神話的次元から根拠づけている、と説く。またさらに神話引用の射程は、『旧事本紀』の三輪山神話から海幸山幸神話にまで伸びている可能性があり、とすると源氏と葵上の物語をもはるかに超え、桐壺巻から若菜上下巻あたりまでの、源氏の人生の骨組み全体にまで影響を及ぼしているのかも知れない。夕顔巻の三輪山神話引用は、第一部前半の夕顔・源氏・葵上の物語を覆うのみならず、より隠微ながら、第二部の若菜巻あたりまでその射程を伸ばしている可能性がある。

第二十三章では、玉鬘巻に見える玉鬘の流離が、『詩経』王風「葛藟」を構想源としていてと考えて初めて、従来より一層全体的に玉鬘十帖を覆えることを指摘する。そしてかかる引用の様相に玉鬘十帖が若菜上下巻の先蹤として、明と暗の交錯する中間的位相の物語となるべく、当初から構想され実現されていくこと、その物語の実現過程には構想の揺れはないことを看取する。間接的ながら、物語の長篇的射程の確かさが、玉鬘十帖においても窺われるのである。

Ⅸ「続篇の物語」では続篇の物語がどのように構想され構成されていったのかを、主に藤村潔氏説を

批判的に検討しつつ考察する。その結果宇治の物語が、当初大君物語として夕霧巻末成立頃から構想され、竹河巻までの準備・過渡的段階を経て実現していくこと、そこで未解決となる課題を担うべく、浮舟（と中君）の物語の構想が新たに成立してくること、を指摘する。そして大君物語を形づくるあるいは読む意味が、従来の見方とは異なる内実を有することを確認する。なおこの大君物語の把握（第三十一章）を、桐壺更衣物語の把握（第十八章）と合わせる時、『源氏物語』全体の意味把握への端緒をつかむことができるはずで、さらに『竹取物語』の把握（第一章）をも関わらせれば、事態は平安朝の作り物語全体にまで拡大させうると考えられる。

すなわち第二十四章では、『源氏物語』の遺言全体が、以後の物語展開を導く方法性を有していることを補助線として、御法巻の「紫上の遺言」以後、新しい物語の実現への動きが、幻巻までの諸所に看取される。続篇の物語の構想が既に正篇終末部の背景に存在する可能性が高い。

第二十五章では、匂兵部卿巻に見える匂宮・女三宮についての薫の意識や、実現しようとする薫の恋の内実と形姿が、すなわち匂兵部卿巻にある薫描写のほぼ全体が、正篇終末部の夕霧と柏木を輻輳させて実現していることを指摘する。闇に惑う薫の始まりが匂兵部卿巻にあるのは確かだが、この薫像の不安定さは宇治の物語の構想の不安定さを意味しないのである。

第二十六章では、紅梅巻において匂宮が多彩な恋を展開させ、八宮の姫君に恋着していくまでを描かれていると確認し、橋姫物語（橋姫巻～総角巻）側の同質な内容と突き合わせて、当初椎本巻終盤において紅梅巻を承けて、薫が匂宮を宇治に手引きするはずであったが、薫をめぐる状況の未成熟によって半年後にその実現が延期されたこと、その結果見えにくくなっているが、本来紅梅巻は、匂宮の中君への恋着を都の側から支える構造的意義を有していることを、指摘する。匂宮と中君の結婚構想の側から、橋姫物語の構想の確かさを看取することができる。

第二十七章では、竹河巻の薫物語全体の背後に、若菜上巻以後の夕霧の物語の類型があることを指摘する。竹河巻は、そのような夕霧の物語の影を有した薫の物語であることによって、匂兵部卿巻から宇治の物語へと続く長篇的な展開の上に明確な構造的位置を占めることとなる。池田和臣氏によって指摘された竹河巻の意義を、補強する事態である。

第二十八章では受動的な中君が、橋姫物語の主要部において大君と同じ状況を表出し、その状況の独自性の低さと表裏する説得力によって、大君の独自な状況を支え続けていることを指摘する。中君の役割は、入水を構想されることが不可能な所にあったのであり、中君入水構想はなかったと考えざるをえない。そこで第二十九章で、中君入水構想説の論拠を再検討し、宿木巻までの入水構想説の論拠が成り立たないことを論証する。そして、総角巻中盤の紅葉狩辺りで、現在の中君物語と浮舟物語の根幹的な構想が具体的に成立してくるという、新たな構想説を提示する。

第三十章では、総角巻以後の中君物語の展開過程を考察して、中君が一貫して著しい受動性を特徴とし、それゆえ二重の苦悩に追い込まれていく動的過程とその苦悩の総体において、浮舟への橋渡しという物語構成上の意義と、大君の判断の正しさを証するという主題的意義を合わせ果たすことが可能になっていることを、確かめる。この物語にも、挫折に終わる中君入水構想の、残滓はない。

第三十一章では、大君物語において問題となっているのが男女関係であるよりも、むしろ生き方であることを指摘し、「女の自律的な生き方が根源的に模索されている」のではないかと、大君の死までの物語全体をそのような観点からたどることができるを確認する。その上で、秋の〈終わり〉から冬の〈終結〉への構想枠の中で、男女の自律的な生き方が真木柱巻や夕霧巻の次元を超えてより根源的に追求されたのであって、そこには確かに女を取り巻く厳しい認識があるものの、むしろそれと背中合わせになって、希望に向けて生きて行こうとする女の姿が模索されていることに注目すべきだと説く。

この大君に託された意味は、桐壺更衣物語、さらには『竹取物語』の帝やかぐや姫の物語ともよく一致する。このことは人々の関係の悲痛に満ちた終末がむしろ背景に過ぎず、それによって浮き彫りにされ厳しく内実を問われる、人々の愛や希望こそが、平安朝物語の核心的意味であり続けることを示唆すると考えられる。

第四篇「後期作り物語の形成をめぐって」(X『狭衣物語』第三十二章)では、『狭衣物語』の主人公狭衣が、第三篇で提示した大君物語の薫についての把握を裏付ける在り方を示していることを、物語の独自性も押さえつつ確認する。

すなわち、狭衣は著しく美的・叙情的であるという特徴を持ち、それと表裏して、人物の心理は形骸的次元に留まる。『源氏物語』のとりわけ若菜上巻に至り高度な達成を遂げたと言われる、心理的必然による物語の形成の方法が形骸化し、それと表裏して、薫像の形姿と一致する美的人間像を獲得しているのである。そしてその狭衣の形姿が、薫のみならず結果的に夕霧と類似していることに、注目する。これは、薫を分解するとその重要な一要素として夕霧があることを、示唆していると考えられる。第二十五章、第二十七章で指摘した、『源氏物語』の薫が、夕霧と柏木を輻輳させ合わせ基盤にして実現している様相が、改めて想起される。狭衣は、その独特な後代の物語の側から、『源氏物語』の薫の実態を示唆しているのである。

論文審査結果の要旨

本論文は、平安朝の物語、とくに『竹取物語』『伊勢物語』『うつほ物語』『源氏物語』その他を対象として、それらの物語の形成について、和漢比較文学的な方法や緻密な表現分析に基づいて多角的に考察を加えたものである。本研究の方法を提示した「はじめに」に続く本論部分は四篇に分かれたれ、全三十二章で構成されている。作品の表現を支える主体としての〈作者〉の存在を措定し、その構想の所在を析出することをとおして、個々の物語の全体的意味を解明することが本論の目論見である。

「第一篇 前期作り物語の形成をめぐって」は、『竹取物語』『伊勢物語』を取り上げた六章からなる。これら両作品における『漢書』『文選』『詩経』その他の漢籍の引用に精細な分析を加えつつ物語内容の捉え直しを試みることによって、それらの物語が固有に持つ構想と全体的意味が明らかにされている。「第二篇 作り物語の構想枠としての〈季節観〉」では、『うつほ物語』『源氏物語』を対象として、登場人物の状況と四季の気候・景物等を密接に関連させる物語の方法について検討が加えられる。全十一章をとおして明らかにされるのは、両作品の四季それぞれの物語内容が特有の偏向を有しているという事態であり、それが、物語内容の展開を支える構想の枠組みとして機能する虚構の方法に他ならないことが指摘されている。「第三篇 『源氏物語』の形成をめぐって」は『源氏物語』「正篇」を扱う六章、「続篇」に関わる八章で構成される。本篇では、「桐壺更衣物語」「夕顔物語」「玉鬘物語」「薫物語」その他、『源氏物語』の世界を織りなす幾つもの物語を取り上げながら、漢籍の引用や先行作品との関係を視野に入れ、また前篇で論じた「構想枠」としての季節の機能を踏まえつつ、丹念な表現分析を行うことによって、様々の角度からこの長大な物語全体の形成に通じる構想の所在が確認されている。「第四篇 後期作り物語の形成をめぐって」では『狭衣物語』を分析対象として、主人公狭衣の人物造形の基盤としての薫の問題を分析することをとおして、『源氏物語』との相関において『狭衣物語』の形成の意義を明らかにしている。

本論で取り上げられた平安朝の主要な作品については既に多くの研究の蓄積があるが、それらの物語に対して、論者は、研究史を周到に踏まえつつ、独自の視点に基づいて漢籍や先行作品の引用の効果を測定し、また構想の枠組みとして機能する四季の果たす役割を明らかにするなど、多様な観点から精細な分析を加えることによって、個々の物語全体の形成を促す構想の所在を確認している。現今の平安文学研究における物語の細部の分析に終始する傾向を批判し、作品を支える構想を軸として物語の全体的な意味の解明を企図する本論は、今後の物語研究への鮮明な提言を含み、斯学の発展に寄与するところ大なるものがある。

よって、本論文の提出者は、博士（文学）の学位を授与されるに十分な資格を有するものと認められる。